
忘却のお姫様

新才力

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

忘却のお姫様

【Nコード】

N1068W

【作者名】

新才力

【あらすじ】

侯爵家であるにもかかわらず、国にすら忘れられた影の薄さであるヴァザール家の末娘・レオナルドは日々の平穏な暮らしに飽き飽きしていた。そんなある日、父に連れられて来た町で、ある事件に巻き込まれる。お嬢さまが剣やら馬やらでかけまわるような恋愛物語

001（前書き）

この物語は全体を通して、人称がくるくるかわります
苦手な方はご注意ください・・・！

桃色の花々が咲き乱れ、蝶がひらひらと目の前を横切っていく。
人々は浮き足だち、どこもかしこもやれ宴会だ花見だと忙しい季節
になった

ただ、このヴァザール家を除いて

「・・・平和過ぎるわ」

「あら、それがいいんじゃない」

（またそれだ）

ヴァザール侯爵家。それは、アルフレッド・ヴァザール侯爵が家主を務めるれっきとした貴族である。多いとも少ないとも言いがそれなりの領地をもっている。侯爵の名の通り、適度な地位もある。オマケに歴史もそこそこある。

ではなぜ、一部の者には糞がつく忙しさをもつこの時期に、ヴァザール侯爵家がこんなにも暇であるのかというと。

答えは簡単、影が薄いのだ

何故かは分らない。けれど、この「セゾン帝国」で侯爵を務めているはずの、その上4人も娘が居るはずのこの家に、皇帝や皇太子の側室話どころかパーティーの招待状すらも届かないあたりを見ると、国にも忘れられているらしいということだけは分かる

国に忘れられていて、上流階級の人間に覚えられている訳がない。
・・・しかしそれでも、アルフレッド・ヴァザール侯爵にはそれなりの地位を持つ友人がいるようなのだ。まあ2、3人だそうだがそんな道ばたにひっそりと咲き、誰の目にも留まらない野の花の

ような侯爵家の人々は、やはり野の花のような遠慮深さと適応力を身につけている

末娘、レオナルドを除いて。

「アリシアお姉様、裁縫はもう飽き飽きですね。早くオースティンお兄様はお戻りにならないかしら」

「しばらくは戻ってこないわよ。オースティンは方向を見極める能力がないのに、馬で旅をしたがるのだから。・・・そうね、そこらを探せばいるかもしれないけれど」

「・・・ハア」

ヴァザール家の末娘である、お転婆ことレオナルド・ヴァザールが一番この平穩であり、裏を返せば全く刺激のない生活に一人、飽き飽きとしていた

長女アリシアはしっかりとした性格で、趣味は裁縫。彼女が紡ぎ出す作品は評判が高かった。もともと、ヴァザール家の中で、だ。

次女アリエルは口達者で頭の回転が速いためか、物書きが趣味で、彼女の童話を読み聞かせられながら三女アルテミシアとレオナルドは育った。その内容の多くは、素敵な王子様とうつくしいお姫様の恋物語でレオナルドはそれがあまり好きではなかったというのは心に留めておく

三女アルテミシアはそんなアリエルの物語の影響を受けてか、夢見がちな性格だ。趣味はアクセサリを作ること。アクセサリ作りと言っても、高価な宝石で作るのではない。銀剛石と呼ばれる、一般市民もよく使用するほどの安価な石を削って繋げるのだ。そのでは中々に美しく、年々腕に磨きがかかっているらしい

そして、四女レオナルド。彼女が何故このような名前を父から授かったかといういきさつ云々はまた別の機会にするとして、その趣味が武術と馬術というのには閉口せざるを得なかった。

「あら、貴女またアリシアの手伝いを放り出してきたの」

「だってお母様、あんな細かい作業すぐに目がチカチカするんですもの」

「・・・少しは生産的な趣味を身につけてくださいな」

こうやって、母エイリーンは何かにつけこの困った末娘に内向的かつ生産的な趣味を見つけさせようとしていたのだが、ことごとく失敗しているのであった

・・・もつとも、最近は諦めの方が強くその回数も減ってきてはいたが

「オースティンお兄様がお戻りにならないのなら、オーガスタお兄様でも構わないのに。どうして二人とも外出中なの！」

ヴァザール家には二人の息子がいた。

長男オースティンと、次男オーガスタ。息子であるからして、侯爵は二人にそれなりの武術を習得させていた。しかしこの二人は武術を好まず、それぞれが外向的かつ、全くの非生産を誇る趣味を持っていたのだ。

方向音痴であるオースティンは馬での旅。少し太り気味のオーガスタは森林浴。オースティンは「長旅だった」と旅が終わる度に家族に告げたが、みな彼が屋敷の半径一キロメートル以内から出られた試しがないということをしっていたし、オーガスタは森林浴の最中に眠りこけて帰ってこないこともしょっちゅうだった。

従って、レオナルドはほぼ常に一人剣の素振りをするかオースティン探しを兼ねた乗馬の訓練をするしかなかったのだった

「・・・ハア」

憂鬱に外を見やる。昨日の雨で地面はぬかるみ、とても馬を出せるような状態ではない。素振りならまだできるだろうが、何しろ面白くない。

そんなレオナに声をかけたのは、父アルフレッドだった

「何故ため息をついて居るんだ？レオナ」

「ああ、お父様。・・・そうだわ、お父様がいらしたんだわ。お父様！剣のお相手をしてくださいませんか！？」

瞳をキラキラと輝かせる娘の前に、父はタイミングの悪さを悔やみ、そしてどうやって逃げるかを考えていた。

レオナはオースティンとオーガスタが居らず、姉の手伝いに飽きた時いつも侯爵に相手を申し込むのだ。

そしてアルフレッド侯爵はその度に手を変え品を変え剣を交えることをなんとか回避してきたのだった。

「・・・よし、レオナ。今日の午後から町に連れて行ってやろう。大道芸人が来ているらしいからな」

「・・・え、本当？！お父様ありがとう！それじゃ剣を交えている暇はないわね、準備をしないと・・・」

そして今回も、アルフレッド侯爵は見事にそれを回避して見せたのだった。

「やっぱり町は賑やかな、お父様」

「ああ、そうだな」

アルフレッド侯爵は嬉しそうに馬車の窓から外を覗く娘に一安心し、御者に馬を止めるよう告げた

馬車から降りる娘の手を取る。忘れられているとは言っても侯爵家の娘だ、それなりの格好をしてみればつきとした貴族に見える。アルフレッド侯爵はけして男前と世の女性たちからもてはやされるような顔立ちではなかったが、妻エイリーンは美しいと評判の子爵家の娘だった。

そのためか、子供たちも顔は悪くなかった。・・・悪くなかった、どまりだったが。

「大道芸人はどこかしら。お父様・・・ねえ、お父様！」

「あ、ああ。多分向こうじゃないか？人がたくさん居るだろう」

「・・・きつとそうね！早く向かいましょう」

スカートをつまんで自らの前を早足で行く娘に目を細めた。彼女はあと二週間もすれば十六になる。十分嫁に行ける年ごろではないか・・・長女アリシアの年齢はもう考えたくもないが、次女以降の可能性に彼は常に気を揉んでいた。何故揃いも揃って嫁にすら行けないのだ。顔は悪くない。地位もある。趣味も内向的であり生産的だ。妻としては十分だろう。・・・レオナにはこれから覚えさればいい

「すごいわお父様！人が飛んでるのよ、ほら見て！」

綱渡りに感動している娘につられて、感嘆の声を上げる

「おお、すごいな」

「見ているこっちが冷や冷やするわ！」

その割にはずいぶん楽しそうな笑顔を浮かべるレオナルドに、自然と顔がほころぶ。これで結婚さえしてくれれば。父の思考は、どの道そこへ行き着くのだった。

「すごいわ、すごいわ」

前に見たのはいつだったか。久々に見た大道芸はやはり素晴らしかった。己を磨き上げ、常人とは思えない技の数々をこともなげにこなしていく大道芸人たち。幼い時、それを目指していたほど憧れた姿がそこにあった

チラリ、と隣に立つ父を見やるとやはりまた考え事をしていた。

最近、彼はずっとそうだった。娘という時は必ず何かを考えている。・・・その何かを口に出したことは、ただの一度もなかったが

父の思案癖につきかたため息を飲み込み、また舞台を見る。今は剽軽な顔をした男が一輪車に乗りながらボールを5つ放り投げるようにして操っていた

「・・・あら？」

しかし、レオナルドの目にとまったものは、剽軽な男でもハラハラする民衆でもなく

6つめのボールを渡すため待機している美女の後ろを動く、不穏な影だった

よく目をこらすと、男が三人、何かに集っている

（・・・あれは！）

その何かとは、団長が観客から報酬を集めるための黒いシルクハットだった

それに気づいた途端、怒りが沸々とわいてくる。日々鍛え上げる

という大道芸人の努力がこうやってお金に替わっているというのに、それを奪うなどと許せない所業だ

隣の父は考え事をしていて娘の様子に気づかない

普段剣術で磨いた術を駆使し、あれよあれよという間に大衆をずるりと抜ける

舞台の影に身を潜め、そのこそ泥共にじり寄る。こそ泥共は気づく気配すらない

（・・・今だ！）

シルクハットから離れようとした三人がみな背中を向けた時、一番体躯の小さな男に飛びかかった

「ひえ・・・っ」

「！？誰だ！」

「しっ。・・・事を荒立てたくないんだったら、奪った金をおいていきなさい。警備兵にだけは突き出さないであげる」

男を後ろ手にとり、ギリギリと締め上げる。小柄な男はまた、ひいという短い悲鳴をあげ、その手からは小銭が滑り落ちた

「ちよつと、お嬢さん！」

「何か文句でも？あなたも早くおいていきなさい」

「違うんですって・・・ああ、もう！」

「・・・え？」

ひよい、その効果音が一番しっくり来るだろう。

リーダー格の男が私と私が拘束していた男を、いとも簡単に担ぎ上げた

人間、あまりに展開が唐突過ぎると抵抗も忘れるらしい

路地裏に繋いであった馬に荷物のごとく積み込まれ、大道芸の騒がしさが消える頃まで、私は見事放心していたのであった

「・・・離してください！ちょっと！」

漸く我に返ったのは、蹄の音だけが反響する暗い路地裏だった。

「ちょっと！きいてます？」

私といえば、少し前から馬上で抗議の声を上げつつけているが、男が馬を止める気配はいっこうにない。

「ちょっと・・・！」

「もう少しですからおとなしくしててください！・・・私たちは城から手配された警備兵です。理由は後々お話しいたしますから！」

「け、警備兵？」

それは自分でも呆れるような間の抜けた声だった。

しかし、何故、警備兵ともあろう役職が、こそ泥のような真似を？抗議の変わりに、新たに頭上に浮かべた無数のハテナマークに気付いたらしい男はため息を一つ落とし、馬を止めた。

「・・・っわ！」

「着きました。さ、降りてください」

男はそう言いながらも私を再び担ぎ、そして地面にゆっくりとおろした。

「・・・ここは？」

目の前にそびえ立つ、立派な煉瓦造りの建物。その周辺には白い花が咲き乱れた木が建物を覆うようにして生えている。

「リオン城内にある警備兵の休憩場所です。少し待っていてください」

そう言い残して、建物の中に消えていった男たち。その背中をおとなしく見送った後、周りを見渡す。すると、入り口近くの木陰に

ベンチを見つけた。

いいものを見つけたとばかりに近づいて腰を下ろす。深呼吸をすると、甘い花の香りが胸の奥まで広がる。緊張と混乱が少し和らいだ。

「そうか、リオン城内の休息所・・・」

・・・ちよつとまで。

ベンチで落ち着きを取り戻したためか脳が正常に働き始める。リオン城？それは、このセゾン帝国を納める皇帝がすむこの国の最重要機関だ。その城内に設置されているということは、ここは警備本部である警備兵総司令所に当たるだろう。

と、いう結論にまで行き着いて、次ぎに浮かんだ疑問は実に率直で的を射たものだった。

「・・・何故？」

その疑問を思わず口に出した途端、中から先程私が拘束した小柄な男が顔を出した。

「あ、あの・・・中へお入りください」

「は、はい！」

そう促されて、立ち上がる直前、スカートに乗っていた白い花に気付く。考え事をしている間に風に落とされたのだろう。あまりに可愛い花だったため、腰にあしらわれた一際大きなレースの間に忍び込ませて、小柄な男が待つ入り口へ向かった。

建物の中はこざつぱりとしていた。・・・と、いうより何もないといった方が近いかもしれない。アリシア姉様やアルテミシア姉様の作る装飾品の数々が彩る我が家とは正反対の光景に、男所帯とはこんなものか、と少し新鮮さを感じながら小柄な男の後について行く。

すこしすると、廊下の突き当たりにある、客間らしき部屋に通された。

その部屋も大きな向かい合わせのソファが二つと、その間に長い木のテーブルが二つあるきりの簡素なものだった。

小柄な男に座って待つよう促され、ソファに腰掛ける。お茶を出してくれるような気配はなく、男は私が腰掛けたのを見届け、そうそうに部屋から出て行ってしまった。

・・・一人の静寂はあまり好きではない。だからオースティン兄様が外出されている際も姉様や父様の元へ向かうなどして、それを避けてきた。

（だというのに、今日は二度目だわ）

ふう、と一つため息を漏らし、部屋に一つだけある大きな窓へと視線を移した。窓は大きく開け放たれており、この季節らしい爽やかな風が後ろで一つに結っている髪を揺らした。

「・・・太刀筋が・・・ぞ!」「は、・・・い!」

「・・・あら?」

風に紛れて聞こえた声に、立ち上がって窓辺へ寄る。その声の主は、すぐそこに広がる中庭で木刀を交えている男たちらしかった。

素早い動きで立ち回り、隙を見て相手の脇を挟み込む。それをかわして、逆に生まれた隙に刀が勢いよく振り下ろされる。

「・・・私も、混ぜてもらえないかしら!」

ここ一週間誰とも剣を交えていないレオナルドがその光景に興奮したのは、致し方しないことだった。

「・・・あの、ランスさん」

「・・・なんだ、ルーサー」

「警総（警備兵総司令部の略称）から、熱い視線を感じるんですが」

ランスことランスロットも、薄々と言わずハッキリと気付いてはいたが、わざと黙っていたのだ。しかし素直な部下の言葉に、仕方なく動きを止め、視線を感じる方へと顔を向ける。

（・・・やっぱり）

ランスロットは逃げ出したい気持ちを抑えた。普段男しか居ない騎士訓練所と警備兵総司令部の中庭でわざわざ訓練をしているには訳があるのに、どうしてこういう日に限って女がいるのだ。

「え・・・」

どうやって回避しようか悩んでいたランスロットの隣で、ルーサーが短く声を上げた。そして、ランスロット本人も思わず呟いた。
「嘘だろ・・・」

窓から熱い視線を送ってきていた女が、こともあろうに窓枠を乗り越えてこちらへ向かってくるのではないか！

いよいよ本気で逃げ出したくなったランスロットを止めたのは、部下ルーサーの一言だった。

「あれ？あの娘さん、なにか叫んでますよ」

「・・・叫び？」

訝しげな視線を向かってくる女に向けると、確かに何か口が動いている。微かに声も聞こえる。その女性特有の高い声に、ランスロットの眉間にまた一つ深いしわが寄った。

「どうせおきまりの言葉だろう。『お話していただけませんか？』とか『お茶でもいかが？』だとか・・・」

不機嫌そうにそれを呟いたランスロットの声は、近くにまで寄ってきていた女の大声で掻き消された。

「私も仲間に入れてくださいー！」

「え・・・」

先程と同じ声を上げたルーサー。そしてランスロットも、全ての推測を外してきたその叫びに、思考を停止させていた。

二人が動けないでいる間に、その突拍子もない発言をした女は目の前までやってきていた。

「あ、の？大丈夫ですか？」

走ってきたためだろう。肩を上下させながら、心配そうに顔色をうかがう様子を何の感情もなくただ見つめて数分、漸く思考が働き始める。

「あ・・・の、仲間に入れて欲しいとは？」

ランスロットより少し先に我に返っていたのであるルーサーが、女にもっともな質問を投げかけた。

「剣の訓練に、交えてください、という意味ですが？」

こともなげにそれを告げる女。当たり前だろう、と口外に付け足して。

「・・・お嬢さん、剣の訓練ですよ？見学ならば・・・」

「違います、混ぜてください！私も久々に剣が振りたくてうずうずしているのです」

につこり。その無邪気な笑顔に、この娘は本気で言っているのだと実感する。その風貌と言動からして、名のある貴族ではないだろう。下級貴族か、裕福な町娘というところか。

「どうします、ランスさん」

耳打ちしてきたルーサーへの返答に口ごもる。どうします、と訊かれてもこちらが聞き返したいぐらいだ。

「・・・お嬢さん、剣を今まで公式で振るったことはありますか？」

女性騎士に前例がない訳ではない。それなりに名をあげた者もある。だから、剣術の類の公式大会では、女性参加も認めているのだ。

「ありません！兄と、父としか」

（なんだ、趣味程度の腕か）

ランスロットは目の前に立つ少女に、自身の持っていた木刀を渡した。

「お嬢さん、失礼しました。私はランスロット・セイラー、セゾン騎士団総監督を命じられている者です。そしてこちらは部下のルーサー・アルフォード、若いですが中々の腕をしています。お嬢さんのお相手はこちらのルーサーにお任せしましょう」

「ああ、申し遅れましたわ。私はレオナルド・ヴァザールと申します。よろしくお願いいたしますね、セイラー様、アルフォード様！」

「ヴァザール様でいらっしゃいますね。ルーサー、真剣にお相手するようにな」

（ヴァザール・・・やはり聞いたことのない家だな。それにしても女性でレオナルドという名だとは・・・変わっている）

ランスロットは一人考えながら、近くの木陰に腰を下ろした。ヴァザールと名乗った娘は早速その長いスカートをまくり上げ、腰で括り止めている。

その様子に更に呆れながら、ランスロットはルーサーに目配せした。

女性に免疫のないルーサーは初めて見る生足に赤面していたが、ランスロットの目配せを受け、その顔を引き締めた。

（ふん・・・手加減しながら勝負をできるだけ延ばして、ルーサーがほんのちよつとの差で勝ったように見せれば、面目も守れるしヴ

アザール嬢もおとなしく帰るだろう)

「では・・・はじめ！」

ランスロットの一声に、二人が対峙する。その時目の前を通り過ぎた白く大きな鳥にランスロットは思わず気を取られた、そのすぐ後だった。

カラン。

木刀特有の軽い音にランスロットの耳は反応した。

(ルーサーめ、すっかり目配せしておいたのにもかかわらず・・・！)

急いで二人に視線を戻す。しかしそこには、またランスロットの予想を裏切る光景があった。

「・・・ルーサー？」

「え・・・？あ、その・・・」

なんと。その手から剣を離していたのは、ルーサーの方だったのである。

(油断のしすぎか、馬鹿め・・・)

ランスロットは目を覆いかけたが、ルーサーは相変わらず放心状態である。まるで、自らの手から剣が勝手に離れていったと言わんばかりに、じっとそれを見つめている。

言葉も出ない二人に変わって、静寂を破ったのはヴァザール嬢の声だった

「アルフォード様、どういことですか！なぜ、手加減されたのですか！セイラー様は真剣にとおっしゃられていたのに！」

「・・・嘘、だろ」

本日二度目の同じ呟きは、怒り心頭のヴァザール嬢にも、放心しているルーサーにも届かず。この季節特有の、爽やかな風に掻き消

された。

「・・・なぜ、手加減されたと思うのですか？」

少しの沈黙が流れた後、こちらへ近寄ってきたセイラー様が口を開いた。美しい金髪が風になびいている。

「・・・勝負が始まってすぐ、私から攻撃を始めました。アルフォード様の構えには肩に隙がありましたのでそこを狙って。すると予想通りアルフォード様はそれをかわしました。しかしです！そこで体勢の崩れた私に攻撃を入れずに、ただよけただけ！しかも着地時に構えを崩して！ですから、その隙について剣をなぎ払わせていただいたのです」

アルフォード様が手加減をされたのには、怒りを示すしかない。なぜ手加減をした？見くびられていた、というよりも。総監であるセイラー様に「腕は確か」だと認められているアルフォード様は所詮女と真剣に勝負する気がなかったのだ、と言うことに、腹が立った。

せつかく、王直属の騎士との一戦というチャンスだったのに。落胆の色を隠すこともなく、スカートをほどいた。そういえば客間で待っていると言われていたことを思い出す。

「では失礼いたします。ご迷惑をおかけしたようで申し訳ございません。アルフレッド様、お相手ありがとうございました」

一礼し、その場を去ろうとした、その時だった。

「待つてください」

先程まで黙って何かを考えていたセイラー様の声に、ゆっくりと振り向く。

「貴女は剣に興味がおありですか？」

「ええ、とても」

すると、またセイラー様は考え込むようにして口を覆うと、再び言葉を紡いだ。

「・・・それなら、騎士訓練所で本格的な訓練を受けてみませんか？」

「・・・え？」

その思わぬ提案に、また間の抜けた声を出す。しかし今度は、アルフォード様も同じだった。

「ラ、ランスさん？それは陛下の許可が必要なのでは・・・」

「なに、別に騎士として迎え入れる訳じゃない。構わんだろう。どうかな？お嬢さん」

それは、あまりに。

願ったり叶ったりの提案ではないか！

「ありがとうございます！」

「わ・・・っ。お嬢さん、少し離れてください！」

急に首もとに飛びついてきた少女にあたふたするランスロットに、ルーサーは信じられないといった表情を隠しきれなかった。

普段は思慮深く、着実に歩を進めるランスロットが、こんな思いつきで、しかも女性を騎士訓練所に迎え入れるとは。

少し用を終えてから再び伺う、と言い残して去っていた少女の背中を見送り、騎士訓練所に戻る道すがら、ルーサーはランスロットに問うた。

「女性を騎士訓練所に招くなんて・・・青天の霹靂ですか？」

「・・・お前、まさか気付かなかったのか？」

すると、ランスロットは心底驚いたように、そして呆れたようにルーサーを見返した。

「・・・俺は見えていなかったから分らなかったが、彼女が言うことは全てつじつまが合っていた。それにルーサー、着地の瞬間構えが崩れるのは、お前の一番悪い癖だろう」

「あ・・・」

ルーサーは思わず口を押さえた。ランスロットはひとつため息を落とし、足を止めてルーサーに向き直る。

「いくら油断していたとはいえ、お前の剣をたたき落としたからには、それ相当の腕なのだろう。俺はそれを見てみたい。欲を言えば、手合わせ願いたいほどにな」

その目は、剣を振るい剣を愛する者特有の熱を宿していた。

(・・・そうだ、この人)

口にしかけた言葉をのどの奥に押し込んで。

ルーサーはまた、ランスロットとともに歩みを進め始めた。

「あーいらっしやった・・・どこから抜け出されたんですか！」

戻ってきてそうそう、私に飛んできたのは小柄な男の怒鳴り声だった。

「すいません、ちょっと興味をそえられるものを発見して・・・窓から・・・」

「・・・窓から？」

心底呆れられているらしい。ため息に促され、おずおずと再び窓から客間へ戻る。すると、次ぎに私を待っていたのは、豪快な笑い声だった。

「あつははははは・・・」

窓から入って、ちょうど向かい側に当たるソファに座っている茶

髪が腹を抱えて、苦しげに揺れている。

「ウィリアムズ指揮官！」

「いやあ、悪い悪い。まさか再び窓から入ってくるとは思っていなかったからね」

窓枠から室内に降りて呆然としている私をよそに、男はひとしきり笑い終えると、目に溜まった涙を自身の指でぬぐい立ち上がった。
「私はエドワード・ウィリアムズ。この警備兵総司令部の指揮官を務めている者だ。この小さい男はフレデリック・エリス。お嬢さんを此処まで馬で運んできた・・・語弊だ、連れてきた男はバツカスだ。ところで、お嬢さんは？」

「レオナルド・ヴァザールと申します」

窓から入ってもバルコニーから入っても咎められたことのないレオナルドは、何故エドワードに大笑いされたのかが分からず、首をかしげながらもそう答えた。

「ほほう、レオナルドというのかい？かわっているね」

「よく言われます」

まあ座りなさい、と促され、向かいのソファに腰掛ける。

私が深く腰掛けたのを確認し、ウィリアムズ指揮官は顔を引き締めた。

「・・・どうしてこの男たちが大道芸人の収入をあさっていたのか、という話だったね。確か」

「は、い」

しばしの沈黙が走る。ウィリアムズ指揮官の真剣な視線に、思わずたじろぎそうになりながら、じっと彼を見つめる。もちろん、沈黙を先に破ったのはウィリアムズ指揮官だった。

「実を言うとね、詳しいことはいえないんだ！」

あっけらかん。その言葉が一番ふさわしいであろう笑顔でアッサリと答えられ、拍子抜けする。

「い、言えない？」

「うん。一般市民には言っちゃいけない秘密任務なの。だから、一番有能な三人を派遣したんだけど、君には見つかったみたいだしね」

すると、後ろに控えていた小柄な男がバツの悪そうな顔をする。見つかったところか、女に捕まってしまったとくれば後味の悪いことこの上ないだろう。

「まあ、それも想定して、対処を言い渡されてるからね・・・。お嬢さん、口止め料、どのくらい欲しい？」

「口止め料？」

「うん、このことを一切喋らないっていう口止め料。上限いっぱいまでなら幾らでもあげるから、黙っててね。喋っちゃうと牢屋行きになっちゃうし首をはねられちゃうかもしれない・・・嫌でしょ？」
飄々とした笑顔で、それをサラリと言つてのける男に戦慄を覚える。それほどまでに大変なことを私は見てしまったというのか。

「く、口止め料はいりません！別に喋りませんから！」

「え？いや、あのね。その風貌からして、少し裕福なのは分かるけどね。一応支払わないとだね・・・。君だって、もうちょっと楽しみたいでしょう？」

「本当に大丈夫ですから！私一応、侯爵家の出ですので・・・」

あまり侯爵家の名を口に出すことはしたくない。いろんな意味で、だが、ここでお金を貰ったところで、出所をどう家族に説明しろというのだ。理由も話せない、秘密も漏らしてはいけなくれば、そういったことにうるさい母に怪しまれるだけだ。

「え？侯爵家？ははは、面白い冗談だねえ。よし、気に入った。君を家まで送り届ける手はずを整えるよ。その時にお金を渡そう」

押し問答である。もっとも、侯爵家だと信じてもらえない可能性は十分に分かつていた。国にも忘れられている侯爵家が、こんなと

ころで憶えてもらえているはずがない。

いつこうに引く様子のないにこやかな指揮官の前に、思考という思考を巡らせる。

「・・・で、ではお金はいくらぐらいいただけるのでしょうか？」

「お金？ああ、そうだね・・・上限まで行けば、早馬が一頭買えるぐらいかな」

「そのお金の代わりに、上等なペンを一本、加工前の銀鉾石を10？、絹の刺繍糸を数束いただけますか！」

モノなら、まだ言い訳ができる。しかも注文をつけたのは、どれもそれなりのモノを扱う雑貨屋に売っているものである。雑貨屋の店主が道ばたに倒れているのを助けて、お礼にいただいたと言えはいい。どれも姉たちの趣味に合わせたものだから、もてあまされることはないだろう。

早馬一頭分のお金をいただくより、ずつといい。

「ふうん、君って本当にかわってるね。まあいいさ、すぐに用意させる。馬車の手配も10分もすればできるから、この部屋で待っていて」

「あ、あの、ウィリアムズ様！」

「なんだい？」

「私、この後、騎士訓練所に行く約束を取り付けてきているのです！家まで送っていただけるのはとても嬉しい申し出なのですが・・・」

「騎士、訓練所？それは誰と約束をしてきたんだい」

「セイラー様と約束をして参りました。ですので・・・」

「・・・そうか、セイラーと・・・。わかった、行ってお出で。用事が済んだら、また此処へ帰ってくるという。私が待っているから、それから送るよ」

「良いのですか、そんな・・・」

「気にしないで。君は面白いから、ね」

「あ、ありがとうございます！」

そう言っで、ふたたび窓から出て行つた少女の背中を見送り、エドワードはどさり、とソファに横になった。

「聞いた？フレッド。あの堅物の女嫌いが、騎士訓練所に女の子を誘つたつてよ」

「はあ・・・私も信じられません。まさかセイラー様が・・・」

「そんなに、あの子が気に入ったのかねえ・・・。ま、面白い子だったけれど」

くすり、と天井に向かって微笑んで。

エドワードは、静かに瞼を閉じた。

窓辺で愛刀を磨いている総監に、思わずため息を漏らす。きっと彼は、女という自らが嫌悪してきた領域の中で見つけたものに、異様な関心を見せているのだ。

——レオナルド・ヴァザール嬢

決してルーサーは気を抜いては居なかったはずだ。確かに、少々油断はしていたがもしの事態を予測して、それなりに気を張っていた。・・・そうであるにも関わらず、あの少女は一瞬の間にこの手から剣をなぎ払ったのだ。

思い出して、じつと右手を見つめる。痺れた感覚はなかった。手から離れた感覚さえ、曖昧だった。まるで、するりと剣からこの手を離れていったかのような。

コンコン

意識を手へ集中させていたルーサーと、愛刀を満足げに眺めていたランスロットの視線が、木製の扉へ注がれる。

この軽く、遠慮がちなノック音を、力の加減を知らない騎士共が出せるはずがない。

ルーサーはゆっくりと、扉を開けた。

開いた扉から顔を覗かせたのは、アルフォード様だった。

「お待ちしておりました、ヴァザール様。どうぞ、お入りください」
外で剣を振るっていた騎士たちに尋ねながら、漸く辿り着いた執務室の扉の奥へと入る。するとそこには、瀟洒ないすに座るセイラ様の姿があった。

「ご用事はもうお済みで？」

「はい。ご丁寧な対応をしていただけたので」

「それはよかった。では、さっそく参りましょうか」

がたり、立ち上がったセイラー様の後を、アルフォード様に続きついて行く。先程より着飾ったセイラー様のお姿に、違和感を憶えた。

「あの・・・素敵なお召し物ですね」

「ああ、これですか。あの後すぐに城から呼び出しがありましたね。流石に練習着では皇帝の前に立てないんですよ」

鬱陶しそうに、革で作られていると見えるジャケットを廊下に脱ぎ捨て、セイラー様は歩みを止める。そして、私のほうに向き直った。

「・・・貴女に、お相手して欲しい男がいましたね」

「剣のお相手ですか？それはこちらとしても是非お受けしたいお話です」

「そうですか、よかった」

セイラー様は満足げな笑みを一つ見せると、またこちらに背を向け歩みを始め始めた。長い廊下を行く道すがらから窓の外を見やれば、訓練中の騎士の姿があった。レオナルドは、その姿一つ一つに熱い視線を送る。自分も、あんな風に毎日剣術に明け暮れてみたい、という羨望を抱いて。

そうしている間に、ランスロット一行は先程の中庭に辿り着いた。少し前まで、ランスロットとルーサーが剣を交えていた場所には、一人の男が剣を振るっていた。

「レオンー！」

セイラー様が声をかけると、レオンと呼ばれた男は動きを止め、こちらに近づいてくる。

「なんだ、ランス。訓練中に・・・。」

そこまで言いかけて、私と男の視線がかち合う。同年ぐらいの幼さが残る風貌に、親近感を抱いた。

（これぐらいの年の男でも、騎士の訓練を受けているのだわ）

「・・・おい、ランス」

「なんだ？」

「お前、何故この神聖な訓練所に女を連れ込んだ」

（・・・ん？）

レオン様とお呼びすればよいのか。その男は、あまりに不躰な言葉を表情もなく言つてのけた。

「・・・レオン、あのな」

「言い訳はいい！ランス、お前だけは違うと思っていたが・・・浅ましい。女におぼれたか」

「レオン！」

「よくも・・・この訓練所に噂話と茶にしか興味のない低能な生物を・・・。総監のお前が連れてきたとなれば、ここも終わりだな。すぐ風俗一色になる」

・・・前言撤回だ。親近感などわくはずがない。その代わりに、はらわたが煮えくり返るほどの怒りが、沸いた。

「・・・大人しく聞いていればなんですか？一体」

「・・・女は黙っている。下等生物が」

「黙っていられますか！女がなんですか、男が何ですか！剣を愛するという気持ちに性別もなにもないでしょう？むしろ、女を上辺だけで判断し、男を尊重する貴方こそ浅ましいわ。愚の骨頂！」

「・・・なんだと」

相手の機嫌は確実に悪くなっているだろうが、そんなことを気にしているほどの余裕はない。こちらだって、怒り心頭だ。

じつとにらみ合うレオナルドとレオンを壁で隔てるするように、ランスロットは二人の間に体を滑り込ませた。

「レオン、今のはお前が悪い。この女性は剣を愛し、振るうことをよしとしている。今回は、お前の相手をしていただくためにわざわざ引き留めたのだ」

「ランスロット！お前正気か・・・この俺を女と手合わせさせるだど？」

「女女とさつきからうるさいですね。貴方のほうがよっぽど女々しくてよ」

「女・・・！」

レオナルドにつかみかかろうとしたレオンを胸で止めると、今度は肩越しににらみ合い始めた二人に、ランスロットは思わずため息をついた。

「・・・レオン。性別で人を判断してはいけない。相手をしていただくんだ」

「いいさ、俺はな。だがその女の命は保証しないぜ。せいぜい明日が葬式ならないよう、間を見てお前が止めに入ることだな！」

「あら、あなたこそ泣きべそかいてセイラー様に余計なお手数をかけないよう気をつけるべきではなくて？」

バチバチと火花を散らす二人に、ランスロットはまたため息を一つ漏らし、この闘志ならばよい試合をするだろう、と前向きに考えることにした。

「よし、二人の同意も得たところで手合わせを始めようか・・・。ルーサー、木刀はもう用意できてるな」

「・・・ちよつとまでよ、ランスロット」

「なんだ」

「俺は、「命の保証はしない」といったらどう？無論、真剣勝負だ」

「お前、正気か！」

「あら、私は構いません。ただ、愛刀は我が家へ置いてきてしまったので、お借りすることはできますか？」

飄々と言ったのけるレオナルドに、ランスロットは気が遠くなる思いだったが、致し方ない。対峙する本人たちがそれを望んでいるのだ。第三者が介入する隙間は、今度こそなかった。

仕方なくルーサーに予備の真剣を用意させ、レオナルド嬢に手渡す。その際に、軽く耳打ちをする。

「レオナルド嬢、くれぐれもお気をつけて」

「ありがとう、セイラー様。私、こんなに腹が立ったの久しぶりの」
につこり。それに彼女に初めてあった時に見せた無邪気さはなく、あるのは凍り付くような怒りだけだった。

審判を務めるセイラー様が、高く手を上げる。目の前には、先程までその憎々しい口で女を罵っていたレオンなどという名前の男がこちらを睨みつけている。

ピリリ、痛いほど張り詰める空気。にらみ合う視線が熱を増し、最高潮に達したその時だった。

「始め！」

勢いよく振り下ろされた手とともに、対峙し合っていた二人が同時に踏み込んだ。男は私の腰に狙いをつけている。リーチ的に、彼の方が先制に有利だ。

案の定腰を狙って襲いかかってくる刃を刃で受ける。このまま刃を滑り込ませて、手元近くで一気に力を込めれば、それは高く舞い上がって、地に落ちるはず・・・だったのだが。

男も厳しい訓練を続けてきた騎士の一人だ。その上本気である。

そう簡単にはいかず、手元に至る前に大きな力で跳ね返された。

（切り返しがはやい・・・！）

脚力が強いのだろう。崩れたのはほんの少しの間で、反撃をするには至らず。ギリギリでよけた男の剣は、後ろで束ねた髪をバツサリと切り落とした。

その様子に、審判ランスロットとルーサーは凍り付く。この国では、女性は髪が命なのだ。兵士である女性も然り、みな腰までは必ず髪を伸ばしていた。

「・・・ハン。汚らしい油質で俺の剣がさびないといいが」

目の前でまた、罵りを浴びせる男をにらみ返し、真正面から突っ込んだ。しかし、力ではやはり男が優勢、真正面勝負は見事にはじき返された。

（どうする・・・これでは勝利の兆しさえみえない・・・）

相手はそれなりの手練れだ。少年といえど、剣の使い方を知りそれを応用することができている。何か、何か方法は・・・

（・・・そうか！）

男から真反対へ走り出す。後ろではついに逃げ出したかと嘲笑っているに違いない。

走って、走って。そしてある程度の距離を築くと、今度は、また男の方向へと走り出した。剣を下ろしていた男も、何か仕掛けてくると踏んだのだろう。構えを元に戻す、その一瞬の隙。

地面をある限りの力で蹴り上げる。ふわり、体が宙に浮いた。

「・・・あつ」

次の瞬間。私は、男の上で、刃の切っ先をその首筋に当てていた。

沈黙だけが走る中。爽やかな風が一吹きし、前髪の一部に銀の美しい髪が紛れた少年の黒髪を揺らす。初めて見たその顔は端正であり、剣を扱うものらしい威厳が感じられた。

「・・・ヴァ、ヴァザール嬢の勝利！」
こうして、私は、

彼との勝負に勝利したのであった。

目の前で起こった出来事に、思考がついて行かなかった。一瞬のうちに、押されていた少女が少年の上で刃を首に突きつけていたのだ。

今ルーサーの目前に、その光景は過ぎ去ったものとなっていたが、彼はまだ夢を見ているようなそんな不思議な感覚を憶えていた。

置いてけぼりをくらったルーサーを気にも留めず、時間はどんどん流れてゆく。

右手に刀を握ったまま、木陰で俯いているレオンをランスロットは心配していた。ランスロットの隣には、レオナルドがすました顔で立っている。そんな彼女をチラリと見やって、ランスロットは先程の光景を思い出すことにした。

（・・・機転が利くのか。その上脚力がある）

見たところ、技術は似たり寄ったりだった。しかし、レオナルドが若干押されているように見えたのは、力とリーチではレオンが優勢だったからだろう。

それを覆すために、レオナルドは助走距離をもうけ、全体重を持ち前の脚力にかけ、剣の背を靴底で蹴り上げたのだ。生憎レオンはまだ若く、数十年鍛え上げられた騎士とまではいかない。逆に加えられた大きな力に堪えきれず、地面に倒れた。そこを、レオナルドがささず抑え、勝負は決したのだ。

（センス、としか言いようがないな）

実は、アルフレッド侯爵がレオナルドと剣を交えることを避け続

けてきたのは、これが理由なのである。兄オースティンも、レオナルドと剣を交えて勝てた試しは無かった。

ランスロットは一人納得すると、レオンの元へ歩み寄った。こちらの気配に気付いてはいるだろうが、レオンは一向に顔を上げようとしなない。右手に握られた真剣はブルブルと震えていた。

「・・・レオン」

「おい、ランスロット」

慰めの言葉をかけようとしたランスロットを遮ったのは、レオンの低い声だった。

「この女を、騎士訓練所に入所させる！」

この女、という二人称に眉をひそめたが、所詮負け犬の遠吠えだ。勝者が構ってやる必要はない、と気持ちを落ち着かせた。

しかし、セイラー様は別の箇所に反応したらしい。肩をびくりと動かすと、何かを考え込むようにして私の方を見た。

「・・・そう、か」

そしてぼそりと呟くと、少年へ再び向き直る。声は聞こえない。だが、何か悪寒のようなものが背筋を走る。それに体を震わせていると、セイラー様がこちらに戻ってきた。

私の前へ立つなり、その口元が緩慢に上がる。後ろで軽く結った金髪が、美しく揺れた。

「ヴァザール嬢、騎士訓練所に住み込みませんか？」
風が、吹いていた。

「・・・ウィリアムズ様」

その呼びかけに、目を覚ます。目の前には、薄暗い中で自身の顔をのぞき込んでいる少女の姿があった。

「ああ、終わったの。今どのくらいの時刻かな？」

「たった今、日が沈んだところです」

たしか、レオナルドとこの部屋で押し問答をしていたのは、午後も深いころだった。エドワードはゆったりと体を起こし、フレデリックの名を呼んで、馬車と彼女が注文した口止め料を用意するように、と命じた。

「どう、楽しかった？」

「は、はい・・・騎士訓練所にはいろんなかたがいらっしやるのですね」

レオナルドのその様子に、だいたいの予測がつく。初めて興味を持った女性を、レオンとでも対峙させたのだらう。奴らは根っからの女嫌いだったのだから。

一言二言、言葉を交わしている内にフレデリックがやってきた。馬車の用意ができたらしい。

「では、お嬢さん。私も最後まで見送らせていただきます」

「え・・・！指揮官ともあらせられるお方にそんな・・・」

「心配しないでいい。お嬢さんの件が、ここ最近の一番大変な事件だったから」

そう何の気なしに答えると、隣を歩くレオナルドが少し小さくなった気がした。

馬車に揺られて、しばらく時が経った。今町はどこにも見えず、あるのは森と畑と農民の家ぐらいだ。

隣に座るウィリアムズ指揮官に居心地の悪さを憶えながらも、今日の出来事を反芻する。

——「ヴァザール嬢、騎士訓練所に住み込みませんか？」

それは、レオナルドにとって夢のような申し出だった。しかし、忘れられていてもヴァザールは侯爵家なのである。その上、娘は四人とも結婚すらしていない。この状態で、若さでいえば一番の有望者である私が女騎士となることはできるのか？・・・決して、父と母は許さないだろう。

自らの夢と、家の名との間で葛藤していたのが表情に出ていたのか、ウィリアムズ指揮官は私に声をかけた。

「どうしたの、気分でも悪い？」

「え・・・あ、いえ。少し考え事をしていて」

にへらと出来損ないの笑顔を向けると、ウィリアムズ指揮官は私の頭をなでた。

「フレデリック！馬をもう少し早められないのかい」

「無理です、指揮官。連日の雨で道がぬかるんでいますので、馬を走らせることすら困難です」

馬は普通、繊細できれいな好きな生き物だ。本来なら泥が顔や目に入っただけで、走る気をなくすほどの。

「私は大丈夫です、ウィリアムズ様。送っていただけのだけでありがたいのですから」

「そう？気分が悪くなったら、言いなさいね」

指揮官の優しいお言葉に、また作り損なっているであろう笑みを返し、馬車の外を見た。

あたりはすでに、藍の闇に塗りつぶされはじめていた。

「こんな郊外までお見送りいただき、ありがとうございました」

そうやって自分に頭を下げるレオナルドの後ろの建物に、エドワードは呆気にとられていた。

（ヴァザール家・・・名家なのは本当だったのか）

後ろにそびえる館は大きく、そして古い。幼き頃、教育係の持つてきていた・・・この帝国の歴史の教科書に載っていた館の外装にそっくりである

（しかしヴァザール侯爵家などという名は、聞いたこともないぞ）
警備兵総指揮官という名に恥じぬよう、それなりに勉強も積み、公のパーティー等にも顔を出してきた。しかし、ヴァザール家・・・その名を一度として見た覚えはなかった

「それでは、失礼いたします」

くるり、と館の方へと向きを変えたレオナルドに、エドワードは更に呆気にとられた。

「・・・フレッド」

「・・・は、はい」

隣に立つフレデリックも同様、同じものを見ているらしい

「どうしたんだ、あの後ろ髪は」

「わ、私も今まで気が付きませんでした」

元々サイドにたつぷりと流されていた長い髪と、首もとを覆うようなドレスの作りであったため、気が付かなかったが。この国で、髪の短い女性など、居るとすれば罪人か、もしくは貧困地区で生活

するものぐらいである。

名を聞いたことはないにしろ、この館をみればそれなりの名家であることは一目瞭然だ。

「フレッド・・・」

「・・・致し方ありませんね」

馬車に再び乗り込んだエドワードを見て、そして前に視線を移したフレデリックは、ぬかるんだ道で、馬を早めた。

「れ、れれれ」

（あ、来る）

身構えた瞬間、顔を赤らめた母から飛んできたのはやはり怒声だった。

「レオナルド！貴女つて人は！アルさんはレオナが居なくなつたと混乱状態で帰ってくるし、その上行方掴めずで私たちがどれだけ心配したか分かつているのですか！その上、なんですかその後ろ髪は・・・！あなた、侯爵家の令嬢ともあらせられる人間なのですよ！」

「ごめんなさい、お母様」

ここまで興奮しきつた母親を前にして、平謝り以外の選択肢があるだろうか。

「・・・ふう」

一通り怒鳴りきつた母は崩れた髪を軽く整え、冷静に私を見据えた。

「そして、その袋はなんですか」

その袋、がさすものはやはり私の隣の台車に大きく構えて鎮座する麻袋のことだろう

（ウィリアムズ様は布張りの箱に詰めてくれるとおっしゃったけれ

ど・・・麻袋で正解ね)

「お、お父様と離れている間、私男の人を助けたんですの。その方が雑貨店を営んでいらっやって・・・少しお茶をいただいてお喋りをしているうちにこんな時間になってしまいましたの！こちらはお土産に、と持たせていただいて、その上馬車でここまで送っていただきましたのよ」

我ながら完璧な言い訳である。人助けをして、女性らしくお茶とお喋りをたしなんで、そして馬車で送っていただくという。

(ああ、なんて貴族らしい言い訳！)

至極誇らしい顔で母に言い訳したが、彼女の顔はまだ渋さを残したままだ。

「では、その髪はなんなのですか」

(・・・あ)

そういえば、こちらの言い訳を考えていなかった。

「え、ええっと・・・そちらの侍女が、お茶の準備をする際に転んでしまいました・・・ケーキを切り分けるナイフが、私の髪をかすめたのでございます」

流石に無理があるか。と、チラリ母の顔を見やると。予想に反し、彼女の顔には、また血が上っていた。

「どこの侍女ですか！そんなもの、ナイフが少しずれていたらあなた、顔を失うことになっていたのですよ！不注意きわまりない！」

どうやら、彼女の意識は居もしない侍女の不注意に移ったらしい。これ幸運と母をなだめすかし、自室へ逃げ込んだ。

ボタン、ずるり。

ドアを閉めた瞬間、脱力する。娘の帰りが遅くなった程度(行方不明でもあったが)でこの怒りようだ。“騎士団に入りたい”などといえど卒倒されてしまうだろう。

「・・・剣とともに生きてゆきたいのに」
そんなレオナルドの呟きは、夜の闇に融けていった。

「・・・誰だ」

執務室でペンを走らせていたランスロットは、感じた気配に顔を上げる。

「さすが、神経とがらせてるだけあるな。久しぶり、ランスロット」
暗闇から現れた久しい旧友に、ランスロットは肩の力を抜いた。
目で来客用のソファに座るように促すと、エドワードは首を横に振った。

「いいよ、俺は立ったままで。それよりランスロット、単刀直入に聞くが、警総の今日の来客を知っているだろう？」

ピクリ、ランスロットの片眉が一瞬跳ね上がった。

「・・・ああ、ヴァザール嬢だろう」

「そのヴァザール嬢の後ろ髪が、騎士訓練所から帰ってきた後すっぱりと切れていたのだが、どういうことか説明願えないかい？」

嫌な笑顔。エドワードは、昔から時折こういった闇を含むような顔を見せる。

（やはり、不味かったか）

その身なりからして、ヴァザールという名は聞いたことがないものの、それなりに富んだ家の者だということは分かっていた。その娘の髪が短いなどと・・・考えられないことだ。

ランスロットは妖しい笑みを浮かべるエドワードに返す上手い答えを探していたが、結局この旧友に隠し事は出来ないことを思い出し、諦め半分に口を開いた。

「・・・彼女を、騎士団に迎え入れたいと思っている」

剣を嗜み、そして剣をこの上なく愛しているランスロットにとっ

て、あの対峙におけるレオナルドのセンスは、放っておけるものはなかった。

本音を素直に口にしたランスロットに対し、エドワードはその妖しい笑みを引つ込め、そして何かを考えてから、返事をした。

「・・・俺は、“少しばかり富んだ名のない家の娘”を迎え入れるというなら、文句は言わない」

その返事に反応したのは、ランスロットだった。

「・・・“少しばかり富んだ名のない家の娘”なら、文句は言わないとは、どういう意味だ」

「騎士訓練所からお嬢さんが帰ってきた後、家まで送り届けた。その時に、彼女の屋敷を見たが・・・今では少なくなった、“昔の貴族特有の由緒ある外装”だった」

ランスロットは静かに、エドワードの言葉に耳を傾けている。

「そこで片っ端から文献と名簿を引つ張り出して調べてみたんだが・・・150年ほど前の貴族名簿によると、ヴァザール家、彼女の家は確かに、30代以上続く侯爵家だった。しかも、このセゾン帝国に自然と吸収されるまで、ヴァザール家はエテという小国すら持っていたらしい」

ランスロットが握っていたペンから、ぽたりとインクが垂れて、紙に黒いシミを作る。

「嘘だろ？ヴァザール家なんて、聞いたことがな・・・」

「真実だ。ただし、それ以降の名簿には、付け足されたように載っていたり、今年の名簿に至っては名前すらない。しかし、その名を剥奪されたという記述はどこにもない」

「・・・忘却の、侯爵家・・・だと？」

「ああ。彼女は忘却のお姫様だ」

ランプの灯りが、ゆらり。二人の姿を、映し出していた。

「当分の外出および剣の訓練を禁止いたします」

母からの冷徹な命が下されたのは午前のこと。正午を回る頃にもなると、自室で意気消沈していたはずのレオナルドはため息とともに、庭にいた。

手持ち無沙汰になれていない右手がうずく。ああ、剣が握りたい。（けれど母様に逆らうほど命知らずじゃない）

すとな、と柔らかい芝に腰を下ろす。母はアリエルとアルテミシアをつれて娘の見合いのためのドレスの新調に、父は数少ない友人宅へ、アリシアは昨日持ち帰った絹糸にたいそう喜び、それに見合った布を購入するため母一行とは別に町へ出かけた。

つまり、今館にいるヴァザールはレオナルドだけだというわけなのだが。

（絶対侍女に監視命令を下しているもの）

朝からひっきりなしに感じる視線に、ウンザリする。目の前で愛らしく花びらを広げる美しい花が憎らしい。

「何か楽しいことはないかしら・・・」

ポツリ、と漏れた独白は自然と憂いを帯びていた。

「・・・はあ？」

「わかってくれ、レオン」

眉尻をつり上げる少年を前に、ランスロットは疲れ果てていた。昨晚のエドワードの訪問は、浅い眠りさえ良しとしなかった。

「何に問題がある？あの女を騎士団に入れる」

髪も短くしてやったんだ丁度いいだろう。

言外に付け足されたそれに、更に強い疲労がランスロットを襲う。極力、この状態でこの少年の向き合いたくはなかったのだが、致し方ない。

「・・・彼女は、侯爵家の娘だ」

「バカいつてんじゃないやねえランス。あの女のどこが貴族だ？」

ハン、と嘲りを含んだそれ。しかし、今のランスロットに自分でさえ信じがたかった真実を、更に我と思い込みの強い少年伝える気力は皆無に等しい。

そんなランスロットの様子に、漸く勘づいたらしい少年は目つきを変えた。

「・・・理由はよくわからねえが、あの女を必ず入れろ」
おれがめつためたのぎつたぎたにのしてやる。

(・・・好戦的過ぎて困るな)

しかしけつして嫌いではないその瞳に宿る闘志に、ランスロットはようやつと口角をあげて見せた。

「だから寝ろ、ランス」

机越しにたたかれた肩に、不意に眠気が瞼を襲う。そしてレオンの次の言葉がランスロットの耳に届く前に、彼は突っ伏せ安らかな寝息を立てていた。

「・・・あのプライドを全て打ち砕いてやる」

絶対的強者に力無く屈し、靴を嘗め泥水を啜る無様な弱者のように

.....

くつり。残虐的かつ彼にとっての快樂的な思考に口元を一瞬歪め、レオンは執務室を後にしたのだった。

レオナルドは森を歩いていた。

森と言っても、ヴァザール家がもつ敷地内のものであるため、「外出」にはならない。あの後暫く考えた末、本邸と庭以外の敷地をあまり知らないことに気付いたのだ。

「森といつても結構広いのね・・・」

腐つても忘れられても侯爵家。それなりの土地を持っているには持っている。何も知らない農民が無断で開拓することもしばしばあるけれど。

ふいと視線をあげれば、柔らかな木漏れ日。瞼を閉じて耳を澄ませれば、小鳥たちの可愛い鳴き声。すうっと大きく息を吸い込めば、肺に満ちる清々しい空気。

（今度から森にも足を運ぼう）

初めて訪れた森の美しさに心打たれながら運ぶ足取りは軽く、小一時間ほど歩き続けても、何の疲れも感じぬほどだった。むしろ、その歩みを小一時間ほどで止めてしまった存在。

それは、目の前に広がった大きな湖だった。

「・・・これも、家の敷地？」

この国には貴族同士の領地の境界に関するトラブルを防ぐため、持ち主が垣根か塀を設けなければならないという法がある。つまり、二つの家が同じ境界にそれを築くため、二重の垣根や塀がそこに設けられる。

しかし、あたりを見渡してみてもそこに境界線らしきものは見当たらず。

「・・・あれ？」

その上、もう一つ素晴らしいものを見つけた。

（湖の上に家がある！）

そよ風に少し波打つ水面が映す白い壁。それはおそらく、軟らかな木材で出来ているのだろう。開けた緑に、透き通った湖と麗しき白。アリエル姉様のお話から抜け出てきたのではないだろうかと思うほど、調和的な美しさをもつそれに見入っていた私は。

「・・・だれ？」

後ろからかけられた、その幼さが残る声に現実引き戻された。そしてほぼ反射的に振り向いた先の声の主に、また声を奪われたのだった。

「・・・っ」

その白銀の髪はさらさらとそよ風になびき、丸く柔らかな灰を宿すその瞳を縁取る白銀の睫毛。白磁の肌に相反する、漆黒の衣。

「・・・おねえさん、だれ？」

その麗しき白銀の眉が怪訝そうに歪んだのをきっかけに、私の思考は漸く正常に働き始めた。「美しいこども」、それが始めの、彼への見解。

「レオナルド、ヴァザール、です」

絶世の美姫を前に心を奪われた騎士さながら、私は美しいこどもの前へと歩み寄った。

「ヴァザール・・・！？アルフレッド侯爵の、令嬢さま・・・っ」

すると絶世の美姫は何故か心奪われた騎士の前に跪いた。（・・・私の思考はまだ正常には働いていないらしい。あまりにアリエル姉様の童話チックな表現だ。）

「僕はシシです。アルフレッド侯爵にはいつもお世話になっています」

「・・・。」

傳いた彼を前に小休止。ようやくと頭が覚めきる。

「・・・えっえっ？」

「僕ったら令嬢さまになんてご失礼を・・・本当にごめんなさい！」
正しくは、その小休止の間にもみるみる溜まっていった大きな瞳から今にも溢れんばかりの涙に頭が覚めざるを得なかったのだが。

「し、シシ君、うわ、え、えーと！」

（・・・あ！）

何か彼の涙を受け取れるものは、と記憶を巡らせていると、腰のリボンに添えておいたアリシア姉様特製の真っ白なレースのハンカ

チの存在を思い出した。以前刃傷の止血に使った際大いに怒られたので、それ以来使用は控えていたのだが、この真珠のような涙をぬぐうにはうってつけの存在だろう。

「はい、泣かないの」

地に膝をつき、シシ君に目線を合わせる。先程までの完璧さすら漂う美しさはどこえやら。ぐすりぐすり鼻を鳴らす彼の頬を伝う涙をぬぐう。

「・・・れおなると、さま。ありがとうございます」

「そんな堅苦しく呼ばないで、シシ君。レオナでいいから」

にかり、と笑ってみせると、彼は漸く泣き止んで、可愛らしく微笑んだ。

「レオナ、さん」

（きゅん）

「うわっわ、レオナさん！」

そのあまりの愛らしさに堪えきれず、彼の体を抱きしめる。赤面しながらあたふたするその仕草も、全てが可愛らしい。

「シシ君、お友達になろう、ねっ！」

「おと、もだち？」

すると、腕の中で暴れずともせわしなく手足をばたつかせていたシシ君が大人しくなる。

「・・・？シシくん」

呼びかけても反応がない。少々抱きしめすぎたかと心配になり、顔を覗くと。

「・・・本当に、僕のおともだちになってくれるんです・・・か・・・？」

「うん。むしろ、なつて欲しいな」

（・・・あ）

「よろしく、お願い、しまっ・・・す！」

半年以上使われていなかったレースの美しいハンカチは、本日可愛い私のお友達の涙を二度もぬぐったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1068w/>

忘却のお姫様

2011年10月9日13時26分発行